

研究部門「境界の溶解と再編をめぐる学際的研究」  
部門イベント開催記録

「クィア・フェミニストの人生を築くということ：  
越境する研究とコミュニティ」

Building a Queer Feminist Life: Research and Community across Borders

Dr. Grace En-Yi Ting

(Japan Society for the Promotion of Science Postdoctoral Fellow, Waseda University)

日時：6月19日（金）21時～23時

講演者：グレイス・エンイー・ティン先生（日本学術振興会特別研究員、早稲田大学）

フォーマット：Zoomによるリアルタイム配信、Q&A

言語：英語（チャットボックスに日本語訳の同時配信あり）

録画講演（字幕付き）：<https://youtu.be/rPy7MoJnD6w>

本講演は、当初は文学術院准教授由尾瞳先生のゼミ「Seminar on Diversity in Japanese Culture」のためのゲストレクチャーとして企画されたが、より幅広いオーディエンスに思いを届けたいという気持ちから「公開講演」という形を取ることになった。英語学位プログラムである国際日本文化論プログラム（JCulP）の学生のために英語で講演するのは当然だったが、準備を進める過程で使用言語に関して複雑な感情を抱くようになった。

早稲田大学での滞在期間が残り少なくなるとともに、今まで海外の大規模な英語圏の学会に力を注いで、2年間の間に一度も日本語で発表したことがなかったことを考えると心残りがあった。英語を解するということがある程度特権の問題で、世の中には英語が出来ないと手の届かない知識や物語に溢れているが、今回の話をそういう縛りから解放したかった。そして、COVID-19の感染拡大のため、早稲田大学キャンパス内で講演を行うことが不可能になり、考えた末に日本語訳の同時配信というフォーマットにたどり着いた。

この講演を準備するにあたって、まずは英語で原稿を書き、それを元に依頼した下訳を骨組みとしながら、日本語で自分の声を一行一行盛り込んでいった。しかし、考えてみると、英語の「原文」も翻訳と言っても良いかもしれない。日本で、日本語で起こった出来事に言及しながら、この講演を通じて、普段日本語だけで会話している友達・知り合いに真心を込めて伝えたいものがあつた。頭の中でぼんやりと日本語を思い浮かべながら英語を書くという、少し奇妙な執筆の過程だった。そして、そのばらばらな言葉をつなぎ合わせ、真摯な思いの込められた日本語の文章を探し求めた。言葉は、いつだって不完全でむらがあるものだが、自分の話を二回にわたって言葉にする機会を与えられて、とても幸運に思う。

日本の学界の状況を考えてみた時に、学者としてだけではなく、クィアの、そして人種的マイノリティの女性として講演したかった。日本で活躍する多くのジェンダー研究者と違って、私は社会学者ではなく、講演の中では「言葉」や「ストーリー」の話をしている。そして、多くのフェミニストと同様に批判的なことも指摘しているが、「愛」「寛大さ」「連帯感」といったものを現実的なものとして扱っている。フェミニズム、ジェンダー・スタディーズ、クィア・スタディーズには色々な形があり、もしこの講演が日本語や英語での対話のきっかけの一つになったとしたら、本当に嬉しい。

\*\*\*\*\*

今日の講演は、大きく二つに分かれています。最初に、クィア／フェミニスト研究者としての私自身の研究と、それが私の個人的な経験にどのように関係しているかをお話しし、その後、私のクィア／フェミニストとしての目標についてお話が出来ればと思います。

この講演は元々、由尾瞳先生のダイバーシティ（多様性）に関するゼミでのジェンダー研究の簡単な紹介の予定でした。そのため、今回のお話で想定しているオーディエンスの対象は、何よりもまず早稲田大学の学生及び他の学生の皆さんになります。この講演を通して、私は、クィア・スタディーズやフェミニスト・スタディーズ、またはジェンダー・スタディーズが、いかに想像してもいなかったような形で人生を切り開いていく可能性を持っているかということをお話しできればと思っています。それと同時に、この講演は私にとっても、日本で過ごしたこの過去2年を思い返し、自分がどのような生き方をしたいのかについて学んだことを振り返る機会でもあります。それは、研究者としてのみならず、時には願望や価値観が大学に求められるものを超えてしまう一人の人間としてです。講演のタイトルにもある「築く」(building)とは、実現すること、学ぶこと、実践することという進行中の過程のことを指しています。

今回の講演では、クィア／フェミニスト研究のモデルの一例を紹介するのであり、日本における他の学者や作家、活動家の人々が積み重ねてきた努力をないがしろにするような意図は全くありません。残念ながら、ここでは、これまでに多くの人が挙げた成果について十分に言及する時間はありません。また、ジェンダー理論に関する基本原則や、LGBTQに関する諸問題の概要の説明はしません。今日は、日本、アメリカ、その他の国からたくさんの方々に参加して下さっていますが、その中には学生や大学研究者をはじめとし、多様なバックグラウンドの人がいると思います。それぞれの人が異なるものを持ち帰り、また理解度も人によって異なってくるでしょう。講演の後に、他のジェンダー研究者やクィア研究者とコミュニケーションをとりたくなったり、あるいは単に何か面白いものや意味のあるものを持ち帰ったりしていただけたらと願っています。

自分自身のことを話すのはとても簡単であると同時にとても難しいことです。日本では、講演会で自分自身のことを話すことは、有名な学者のみに許されている傾向があります。私には生涯を代表する研究の業績が全くないだけでなく、私の考察の多くは、より豊富な知識を持っている研究者の方が上手く説明することが出来るかもしれません。

しかし、クィア・スタディーズやフェミニスト・スタディーズについての無味乾燥な説明をする代わりに、今日は、示唆に富んで、生き生きとした、私の個人的な話をお話できればと思っています。大学の対話において、ジェンダー、人種、セクシュアリティなどその他アイデンティティーに関する事柄を排除することは許されません。これらを「私的なもの」として簡単に片付けてしまうのは、現状を維持することを意味し、建設的な変革への障害を作ってしまう。具体的に言うと、LGBTQ、クィアとして自認している人々は大学にいます。私たちは大学の教員であり、学生であり、職員でもあります。私たちがカミングアウトしていようがなかろうか、あなたが私たちのことを誰か知らなくとも、私たちはあなたの隣で普通に働いていて、存在しています。

「クィア」の人生、「フェミニスト」の人生を生きるとはどういうことかを表現する全てのお話を共有することは出来ませんが、クィア・フェミニスト研究をしているクィアの台湾系アメリカ人女性としての私自身の立場性(ポジショナリティー)について繰り返し明らかにしながら、私自身の話を共有したいと思います。また、この講演が、私にクィア・フェミニストの人生を築くことについて教えてくれた人々に深く感謝を伝えるものとなればと願っています。

## 最近の研究

私の研究の短い紹介になりますが、この一年で三つの新しいプロジェクトや論文に取り組んできました。

まず、2019年3月にUniversity of California, Los Angeles (UCLA) で、川上未映子が編集を担当した2017年の『早稲田文学 女性号』について発表しました。この『女性号』は小説家や、詩人、文学研究者や翻訳者、そしてアーティストの82人の女性寄稿者の作品を取り上げていますが、その中でも『女性号』におけるポピュラー・フェミニズムの強調や、トランスナショナル・フェミニズムの位置付けなどの問題について分析しまし

た。この発表を準備する過程で、いかに「アカデミック・フェミニスト」や学問的「知識」がしばしば日本のフェミニズムのブームにおいて不信の対象となっているかということに気がきました。この現状に対する懸念は、今日の講演の一つのきっかけにもなっています。すべてのジェンダー研究者を代表しなくても、クィア・フェミニストの目標を持った一人の学者として、より「人間らしい」姿を知ってもらいたかったのです。

ふたつ目に、ハンガリーでジェンダー研究が禁止されたことを受けて、2019年6月に生駒夏美先生とチェルシー・センディ・シーダー先生 (Chelsea Szendi Schieder) が主宰したシンポジウムで短い発表をしました。アンドレア・ペト先生 (Andrea Pető) の基調講演を受けて、日本を拠点としている研究者が日本の大学における多様性に向けた奮闘や、オンラインにおけるトランス排除の問題などについて話しました。私は、トランスナショナルのフェミニストの連帯、そして英語圏の日本研究における、人種やジェンダーの問題に立ち向かう必要性に言及しました。国際基督教大学での発表は、自分の個人的な経験を公の場で言及する初めての機会でしたが、この発表の執筆を通して、もう一つの自分の声を発見しました。そうすることで、新たな対話の場を開き、他のマイノリティに勇気を与えるために、多大な貢献とは言えなくても、些細な文章を残すことが出来ればと思いました。

そして、最近になって、日本語で作品を書く台湾人の李琴峰や、ベトナム系アメリカ人のオーシャン・ヴォン、そして台湾人のレズビアン文学を代表する邱妙津の小説を通して「クィア・アジア文学」を理論化するプロジェクトの研究を始めました。この研究は、彼女・彼らの作品の中で、いかに「クィア性」や「越境性」という経験が異なりながらも交差しているかを比較する試みです。また、日本、中国、アジア系アメリカの文脈を横断し、様々な矛盾する「アジア」の概念についても考察しています。「日本研究」に所属しながら、元々は日本、中国語、韓国文学の比較研究を目指して博士課程に応募した私は、「日本」のみに興味を持っていたわけではないのです。また、英語、日本語、中国語の世界に挟まれた台湾系アメリカ人として、自分自身のクィアな流動性と多言語的な生い立ちの特権を考える上で、このプロジェクトに意義を見出しています。

## 博士論文で江國香織を読むこと

次に、私の研究の根底にあるものを説明するために、今取り組んでいる単著の基盤ともなっている博士論文に立ち戻ってみたいと思います。

大学院生の頃は、しばしば周りの男性の研究者たちが強い軽蔑の眼差しを日本の女性作家に向けているのを感じました。特に、90年代以降に活躍した女性作家たちは、しばしば社会批評を含む純文学を書いていないと非難されていました。癒しとなるものや、日常のこと、とりわけ食べ物のことについて書くことは、自墮落的で、政治的な意義がなく、日本文学の衰退の印として見なされました。

これらの性差別的な偏見について慎重に考察した結果として、女性作家の作品における日常習慣や家庭空間の表象が博士論文のテーマとなりました。多くのフェミニスト・スタディーズやクィア・スタディーズの学者にとって、こういった文学作品を研究対象にするのはおそらく当然の選択とは言えません。一見すると「フェミニスト」的でない小説もありますし、それらの多くはクィア・アイデンティティーを描いていません。私が分析した、吉本ばなな、川上弘美、江國香織の小説の中で、登場人物の女性はいくつもありふれた日常、いわば否定的に女性や異性愛規範的な家族に結び付けられた私的空間において、平凡な生活を送っているだけです。しかし私は、「政治」というものは、自分たちの知的な信条と日常的な経験や欲望を調和させることから始まるべきだと信じていました。これらの女性作家が必ずしもジェンダー規範や性規範に異議を申し立てる「フェミニスト」や「クィア」な試みを行っているとは思っていませんでした。しかし、私たちが文学に何を期待し、「ラディカル」という概念においてどのように線引きをしているのかを問題化するには、これらのテキストをフェミニスト的・クィア的な読み方で取り上げてみたかったのです。

博士論文の中で、私はクィア理論家であるジャック・ハルバースタム (Jack Halberstam) とアン・クヴェトコヴィチ (Ann Cvetkovich) による、失敗 (failure) やうつ状態 (depression) に関する理論を元にして、自分の主張を述べています。ハルバースタムは、失敗というものは攪乱の可能性を提供すると主張しています。ハルバースタムは次のように言います。「失敗に関するクィアな技は、不可能なものやあり得そうにないもの、



見込みのないもの、そして目立たないものを軸とします。それは静かに敗北し、その過程で、人生の、愛の、芸術の、そして存在するための他の目標を想像します。」「成功」につながる社会の誤った基準に応えることが出来ない時、その失敗は実は社会的規範の制約の外にある可能性を明らかにします。そして、矛盾しているように聞こえてしまうかもしれませんが、クヴェトコヴィチは自分の研究についてこのように言います。「うつ状態に深く関わり合うことを通して、この本は、絶望、希望をなくした状態、行き詰まった状態の経験に密接に繋がっている希望、創造性、精神性の形への道をも見つけます。」

これらの主張をより分かりやすく説明するために、ここでは90年代の江國香織の『きらきらひかる』と『落下する夕方』という二つの小説を取り上げ、二人の女性の主人公に関するクィア・リーディングを簡単に紹介したいと思います<sup>(1)</sup>。

江國香織は、愚かで、非合理的で、自己破滅的でさえあるステレオタイプに近い「恋する女性」をしばしば描きます。『きらきらひかる』では、笑子は、うつ病とアルコール依存症に悩まされ、睦月というゲイ男性との、両親を満足させるための政略結婚に苦しみます。彼女は常に泣いていて、憂鬱であり、男性の恋人がいる睦月への恋愛感情について不安に感じています。90年代の日本における社会的期待からすれば、女性として、妻として、笑子は完全な敗者です。睦月が料理と掃除をする間、彼女は酒を飲み、歌を口ずさみます。

この不完全な結婚生活の中で、笑子は睦月と共有される空間とそこで営まれる日常習慣に深く愛着を抱くようになります。ある場面で、彼女はこの上ない安心を味わいながら床に寝そべります。

「目をつぶって体じゅうで耳をすませる。なつかしくて清潔で安心な部屋の気配。こうしていると、睦月に抱かれているみたいだ。…何てやさしい部屋だろう。壁も窓も天井も床も、全部が私を見守ってくれている。目をあけなくてもわかる。感じるのだ。ここが私の場所だ。」

後に、笑子はこの結婚が破綻しないよう、出来ることをすべてやります。彼らの両親はこの結婚の真相に気づき、怒りを露わにしますが、笑子は諦めることを拒否します。彼女は睦月の恋人である紺のために同じ建物内にアパートを用意することさえします。小説の終わりでは、彼女の睦月との結婚がそのまま続くかどうかは分かりません。そして笑子は、喜劇的な登場人物として描かれます。やることのほぼすべてが失敗に終わり、いつも無分別で突飛なアイデアを思いつき、酒に酔っては泣き崩れます。

『落下する夕方』では、同じくらい仕方のない梨香という女性が登場します。8年間付き合った男性が彼女の元を去ってからも、彼との思い出を手放すことが出来ず、梨香は同じアパートに住み続けます。大きなアパートの家賃を一人で払えなくなると、三角関係の間柄である華子より、同居するという変わった申し出を受け入れさせます。

『きらきらひかる』の笑子のように、梨香は、彼女の愛を定義づける家庭空間における日常に執着心を抱いています。恋人が去った後、数ヶ月たっても、彼が置いて行ったジャケットは家の中の全く同じ場所に置かれたままです。彼が職場で掃除をしていると言うと、自分自身で「クレイジー」と思いながらも、彼と同じ時間を共有するために家で掃除を始めます。梨香は華子を通じて彼と連絡を取り続け、次のように述べます。「ただ聞いていたかったのだ。健吾の声、健吾の気配。たとえそれが華子と華子と華子と華子の話でも。」小説の終わりでは、彼女はようやく健吾への恋愛感情を断ち切り、アパートを去ると決断しますが、小説全体を通して、自分自身のために頑張っている状況を乗り越えようとする様子は全くありません。苦しんでいるにも関わらず、彼への愛情を疑問視することはないのです。

これらの女性たちは、「強い」「独立した」女性像に当てはまりません。さらに言えば、男性に恋をしている女性について「クィア」という言葉を使うと、混乱を招くかもしれません。そして、最後まで彼女らの愛は何の「成果」も挙げませんでした。しかし、彼女たち、または彼女たちの愛を通して、明確な進展や行動に基づかない「クィアな希望」を論じることが出来ます。その希望は、私たちがどのように喪失や苦しみを「克服す

(1) これらの作品については、以下の論文で分析しています。

Grace En-Yi Ting, "Ekuni Kaori's Tears in the Night: The Brilliance of Queer Readings for Contemporary Japan," *Journal of Japanese Studies* 47, no. 1. (Winter 2021) [forthcoming].

る」必要があるのかということに関する思い込みに逆らうものです。今日の世界において、私たちには人生のすべての困難を克服するための道具を備えているわけではないという事実は明らかなはずです。それよりも、私たちは構造的抑圧によって築かれた社会に生きていて、個人の意思はその中のたった小さな一部でしかありません。私たちは生き抜くために、たとえ不完全な戦略だったとしても、それを必要としているのです。

『きらきらひかる』の笑子は、極端な不器用さや無謀さによって、私の言う「クィア」な可能性につながり、社会に認められていない、違った形の愛や繋がりを想像することが出来ます。彼女の些細な愛は日常生活、ありふれた日常習慣に築き上げられています。植物に水をあげたり、ベッドを整えたり、一緒に星を見たりすることです。小説の早い段階で、笑子は、睦月との偽装結婚が、誰も真の愛が期待出来ないものだと確信しています。その結婚は社会の主流に溶け込むことが出来なかった彼らの失敗の結果なのです。しかし、笑子にとって、この結婚と生活は、涙を流しながらも守る価値のあるものとなり、この展開によって異性愛規範のモデルがいかに重要なものを記す想像力に欠けているのかということも分かることが出来ます。

『落下する夕方』において、梨香は進歩や克服の物語を作らずに、単に季節が変わるごとに外の花や木が開花したり、枯れたりすることに目を配ります。彼女は未来に目を向けることも出来ず、自分がどこへ向かっているのかさえ分かりません。しかし、彼女は形だけでも生き続け、何も上手く出来なくても絶え間なく先へ進んで、一日一日を乗り切っていきます。一方、江國香織の作品は、完璧とは言えません。特に、『きらきらひかる』に描かれたゲイ男性の描写を問題化する批評家もいます。しかし、ここで私が論じているクィアな戦略では、冷酷な世界の中で追い込まれると、完璧ではないテキストにおいて愛と生存の希望を見つけることが出来るのです。

ハルバースタムやクヴェトコヴィチといったクィア理論家は、なぜ失敗や鬱について語るのでしょうか。私が研究で用いる多くのクィア・フェミニスト理論家は、完璧ではないテキストを取り上げ、希望を見つけるためにそれらを読み直します。それは、思いもよらない場所で、攪乱の意外な方法を見つける必要性から生まれ出る戦略です。不安定な現代社会において、力のない人には大きな「革命」というものが手に届かないところにあります。その代わりに、人は毎日をなんとかやり過ごし、どんなに屈辱的で不器用に見えても、自分にとって最も大事なものを守るためにあらゆる方法を探し出します。資本主義社会は、私たちがどれだけ生産的で有能かということによって人間としての価値を決定します。しかし、様々な形として存在する人生や愛はそのような基準に当てはまるものではありません。より良いものを想像するには、常識に抵抗する必要があるのです。

なぜクィア・スタディーズでこのような理論が生まれてきたかということ、クィアの人は社会で「失敗」とされるものと深い関係を持ってきたからです。クィアである「失敗者」の私たちの愛や存在を拒否する社会において、私たちは失敗や鬱、恥や悲しみといったものの経験をとてもよく知っています。

江國香織の作品について、このようなクィア・リーディングを最初に試みたのは、数年前、卒業するために博士論文の締め切りに間に合うのに必死だった時でした。今になって、自分が論じたことの欠陥について考えることもあります。例えば、思慮に欠けた、向こう見ずな愛は確かに他者を傷つけることもあります。恋をする女性を解釈する上で、様々なタイプの有害な愛の形というものが、人をだめにするという事実も指摘すべきだったに違いありません。しかし、結局、自分が言いたかったことを今でも否定するつもりはありません。すべての愛が完璧で道徳的とは言えませんが、愛や、人々、また作品を、それらが恥ずべきもの、または欠点があるものという理由で否定してはいけなくて今でも信じています。

「書くこと」と「読むこと」は、人の世界を揺るがす力を持っていて、想像よりもさらに深く人の中に入り込むことが出来ます。私は女性作家の作品を研究したくて博士課程に入りましたが、入った当時はまだフェミニスト・クィア理論についてあまり詳しくありませんでした。それから、自分に共鳴する理論、ジェンダーとセクシュアリティがいかに流動的で多面的であるか、いかにアイデンティティーが複雑で不確かなものであるかについて語っていた理論を見つけました。しかし、20代の終わりになると、クィア／フェミニストのものを讀んだり、研究で用いたりする中で、以前と同じ自己認識を持つことも出来なくなりました。

成長する中で、私は自分自身のことをレズビアンともバイセクシャルとも考えたことはありませんでした。時々女性に惚れたり、ある女性に恋をしたりすることもありました。しかし、私はクィアのアジア人女性に出

会ったことがなく、また、誰も私をクィアとして見なしたことはないようでした。白人が多い郊外で育ったため、私は目立ってしまい、なさけないほど内気でした。私が求めた、憧れたのは、ただ「普通」の目立たない存在でした。女性同士の恋愛関係を思い浮かべた時に、そういう煩わしいに決まっている関係が空想か悪夢に近いと感じていて、絶対現実の一部とは思えませんでした。20代後半になったら、ストレートのまま生きることはあまりにも辛く、しかし、「クィア」になるのには遅すぎるように感じました。もしクィアの人に特定の経歴やスタイル、人生の節目、そして人間関係が必要とされるのならば、私はすでに取り返しのつかないほどの失敗をしていました。私は、「普通」であることに失敗し、「クィア」であることにも失敗しました。

そして、恋愛対象の性別の問題だけでなく、さらに広い意味で、「正しい」方法で他者を愛し、他者と関わることに自信がありませんでした。エリート校であるイエール大学に在籍する有色人種の女性として、そもそも優秀でも社会術に優れているわけでもなく、男性中心的な環境の中で頻繁に傷つき居心地の悪さを感じていました。結果として、どのような形の危害からも自らを守ることが自分自身の責任であると自分に言い聞かせました。研究をやり遂げ、生き抜くためには、周りへの期待を抑えて、どんな感情も投げ捨てられる人になるのが私の責任だと。

しかし、私は、そのような人物になれないという事実打ちのめされました。絶えず戦略的に考える、効率的に行動する、あるいは完全に自分を守ることに集中することが明らかに出来ませんでした。それどころか、私はそれらの反対で、人を気かけないほうがいい時に、まさに気にかけていました。そして、不健全な関係を断ち切ることも出来ませんでした。何より、私はいつも「分かっていたはずだったのに」と思って、自分を責めました。これを私に叩き込んだのは、多くの場合は他の女性でした。女性の要求を拒絶する世界において、「頭のいい」「強い」女性は常に一歩先にいる必要があるからです。

このような背景の中で、私は江國香織の小説を読み、彼女自身の女主人公に対する愛と尊敬に触れました。『きらきらひかる』のあとがきに、江國は恋に落ちる無分別な人々にこの小説を読んでもらいたいと述べ、次のように言います。「素直に言えば、恋をしたり信じあったりするのは無謀なことだと思います。どう考えたって蛮勇です。それでもそれをやってしまう、たくさんの向こう見ずな人々に、この本を読んでいただけたらうれしいです。」それから、『落下する夕方』のあとがきでは、梨香の屈辱的な愛についてこのように述べています。「私の心は夕方にいちばん澄みます。…私は冷静なものが好きです。冷静で、明晰で、しずかで、あかるくて、絶望しているものが好きです。」つまり、愚かなものや、絶望的なものは、美しく価値のあるものと見なすことも可能なのです。江國は、おそらく自分の物語がクィア・フェミニスト的に読まれることを全く想像していませんでした。しかし、時空間を超えて、想定されてもいない読者のために、物語は予期せぬ、予想外の深い意義を持ってきたということは、決して珍しいことではないのです。

クィア・フェミニストの運動に関わること、世の中に対して冷酷にならないこと、このようなことに専念すると絶望を感じることもあるかもしれません。クィア・フェミニスト的な目標に到達するには、常識に逆らう、恋愛小説に引き込まれそうな「ロマンチスト」になる必要があるのかもしれませんが。つまり、楽観主義者でも悲観主義者でもなく、この両方を併せ持ったものです。何度も繰り返して失敗する覚悟が必要かもしれません。ある時は、形だけで生き続けるのに全力を尽くし、それ以上は何も出来ないかもしれません。しかし、無防備さや不器用さを拒まず、屈辱的でつらい方法に自身をささげることでも試してみると、愛や存在の新たな可能性も見えてくるはずです。ここのクィア・フェミニストの主張は、女性だけのためではなく、またクィアの人だけのためでもありません。むしろ、人々が人間として価値を持つために無理矢理でも特定の型にはまることを強制させる社会への批判になります。常識を覆すことによるのみ、より良い価値観を元にして、新たな生存や抵抗への道を見つける力が現れてくるのです。

クィア理論を学ぶことで、自分が人間として欠陥があるという辛い思い、途方に暮れる経験などを完全に避けられたというわけではありません。クィア理論によって、初めて女性を恋愛対象として見て、それにまつわる混乱の気持ちを防げられたわけでもありません。自分が想定していなかった人生に直面し、それを歩み始める困難さを無くすことも出来ませんでした。学者として備えていた知識は、決してそのまま自分を受け入れる力になりませんでした。博士号を取得し就職活動に取り組みしましたが、クィア研究をしているため、クィアの



人と疑われることがよくありました。思いやりのない発言やおこがましい質問を受け、自分がクィアのアジア人女性、流行りの「多様性」の象徴として商品化されていることが明らかでした。クィアとして「不完全」「だめ」な自分を責め続けながら、学界の中の市場性を考えた上で自分の道徳や動機を疑ったこともあります。学界の激しい競争の中で、同時にクィア・フェミニスト研究とクィアとしての自己認識を併せ持つことが、自分の潜在意識によって計算された戦略なのではないかとさえ考えました。自分に値しない得点を与えられないように、なんとかして目立たないように、自分を隠す自己責任があるのではないかと思ったこともあります。

クィア理論はすべてを解決することは出来ませんでした。自分を違った角度から見るための想像力を与えてくれました。それに伴う混乱や苦しみもありましたが、最終的には、人生において何をやりたいのか、どうやって人を愛するのかについて確信し、より幸福で、より自信を持つようになりました。クィア理論以外は、ただ時間をかけて一日一日をそのまま受け入れて過ごして、周りと接して、小さな親切を与えられたことによって道を模索してきました。今なら、自分がクィア、あるいはバイセクシャル、パンセクシャルと言うのが前より少し楽になりました。そして、現在取り組んでいる研究では、まだ博士論文に基づいた異性愛の恋愛小説を扱っていますが、女性同士の欲望やつながりにも触れるようになりました。

幾つかのアメリカの大学で教えてから早稲田大学に来て、学生や他の若者に会うたびに、自分が学んだことを伝えたいことがあります。多くの学生は私と同じほど頭がいいですし、若い自分と比べたら遥かにしっかりしている学生もたくさんいます。しかし、社会にどんな気持ちにさせられても、自分が決して人間として不十分ではない、ということはどうしても知ってもらいたいのです。これは、クィアの学生、女性、他のマイノリティに対するメッセージだけではなく、就職活動で苦勞している人、日常生活の困難に対処している人、この言葉を必要としているすべての人に送りたいと思います。あなたの失敗、あるいはあなたが自分の失敗と見なすものは、あなたの人間としての価値を決定づけることはありません。あなたの弱さ、もしくは心の傷は、あなたのせいではありません。あなたは決して遅れていませんし、すべてが手遅れでもありません。周りに合わせて溶け込まなくてもいいです。中途半端で、迷ったり、混乱したりしても構いません。あなたが選んだ生き方、人の愛し方は、誰かを感心させる必要がありません。あなたは、間違いなく、いつでも人として十分です。私のクィア・フェミニズムの基盤にあるのは、こんな思いなのではないかと思っています。

ここまで、私自身と研究について紹介してきましたが、主に小説の文脈に限られている話でした。続いて、私の中で真っ先に思い浮かんだ、幾つかのクィア、またはフェミニストの目標について少し触れてみたいと思います。これらは、女性の学者、クィアの学者、その他のマイノリティの学者、そして特に英語圏で活躍しているフェミニスト・クィア研究者から刺激を受けてきたものです。特に今日の講演のタイトルは、セクシャリティーや人種、ジェンダーなどの個人的な経験を通して学界への批判を深めたことで知られているクィア・スタディーズ研究者のサラ・アーメッド (Sara Ahmed) から着想を得ました。

私がフェミニスト・クィア・スタディーズの学者として自分の立場をどのように捉えているのかというと、それはあらゆる友情、出会い、テキストを通して、周りの倫理感、知恵を吸収してきたという非公式の教育の上に築かれたものとも言えます。自分の学者としてのアイデンティティ、または自分になろうとしている人間は、自分が信頼して、尊敬して、深く愛している人々によって形作られました。従って、以下の点は、自分の個人的な話だけではなく、さらに広い意味で学界における理想や苦闘を示唆するものです。まだ実現されていないもの、「築く」こと (building)、「なる」こと (becoming) への願望が強調されていますが、空想的な理想をそのまま並べたというわけでもありません。今までの経験に基づいて、学者、或いは一人の人間として、これからどのように成長していきたいのかということに、しっかりと根ざしています。

## 書くこと、読むこと

基本的に、私は自分が有意義で、楽しいと思えるように読むこと、書くことを続けていきたいと思っています。例えば、食べることについて、「あなたは、あなたが食べるもので出来ている」と言いますが、読むことに関連させるとどうなるでしょう。英語、日本語、中国語で色々なものを読んでみる自分にとって、栄養や喜

びを一番与えてくれるものは何でしょうか。人はどういうふうを読むことによって人として形作られるのでしょうか。それから、学者にとって、書くことは、生産性、成果、そして生計を立てることを意味します。それと同時に、書くということは、自分の声を見つけ出すことであり、人に読まれることでとても貴重なものを与えられる経験でもあります。学術的な論文だけではなく、いつか小説などを書いて、まだ発見していない自分の声を育てることが出来ることも願っています。

## 学界の中で連帯を築くこと

ティアの有色人種の女性、または非日本人の学者として、私は、学界の中でいかに他のマイノリティーの人々に対してサポートを提供することが出来るか、日頃思案しています。これにまつわる問題は、女性同士、あるいは異なるフェミニズムの間の緊張関係の観点から見ることにも出来ます。例えば、黒人フェミニスト研究者やポストコロニアル・フェミニスト研究者による、主流の白人フェミニストに対する批判などが考えられます。日本の文脈では、例えばウーマンリブの中でのレズビアン之苦闘や、在日コリアン女性たちの経験、そしてソーシャル・メディア上でのトランス排除などをあげることが出来るでしょう。

私は、自分の経験や周りから聞いた話から、学界の女性たちに関して失望することが多くあります。他の女性たちへのマイクロアグレッションや、言葉の攻撃、そしてパワーハラスメント、キャリアの妨害などを犯している女性もいます。さらに一般的に言えば、女性たちはしばしば自分が権力者になって、他者に権力を振って、口を封じる可能性を受け入れ、責任をとることを拒否しています。特に日本人や他のアジア人女性たちに接すると気になったのは、ミソジニーや人種差別を深く内面化しているせいで、他の「若い」有色人種の女性が、まさに私が「若い」有色人種の女性であるために、敬意を欠いて振舞うことがよくあるということです。

私は大学院生の時に、イェール大学の著名なポストコロニアル・トランスナショナル・フェミニズムの学者のインダーパル・グレワル先生 (Inderpal Grewal) と出会ってから、フェミニスト的連帯 (feminist solidarity) に関心を持つようになりました。彼女のポストコロニアル・フェミニズムの授業では、植民地主義と支配の歴史の文脈を考えた上で、少女漫画におけるフランス流の西洋菓子の表象について論文を執筆しました。彼女は、私が発表の日に教室まで持ってきた手作りのケーキを暖かく歓迎してくれただけでなく、その時から、私を励ましてくれたり、時々不足しがちな想像力や勇気について叱ってくれたりして、私のかけがえのないメンターになりました。より広い、より複雑な世界について常に考えるよう促してくれ、内気で自信がなかった大学院生の私に積極的に関わってくれた彼女の姿は一生忘れないと思います。

学生時代は、インダーパルの知性とカリスマに圧倒され、そして自己防衛として反射的に対立を避ける習慣はなかなか抜け出せなかったのです。今は、時々独り言のように「インダーパルなら何と云うだろう」とふと思ふことがあります。私は、決してインダーパルほどの能力を身につけることは出来ませんが、彼女が暖かいユーモアのセンスで、敬意を持って接してくれたことは忘れられません。彼女と出会って、私は初めて女性や他のマイノリティーを支えるために、休みなく努力をしているフェミニストの学者の姿を間近で見たのです。

## 言語と文化の境界を超えてつながりを作ること

私の目的の一つとして、目下のことから少し離れて別の世界に目を向けると、思いがけない場所や対話で連帯の可能性が潜んでいるということを目撃してみたい、ということがあります。英語、日本語、中国語の三言語を使いこなし、日本研究、華語圏研究、アジア系アメリカ研究にわたる研究興味を持っている者として、本当の理解や知識というものは、完全に把握しきれない全体像を意識して初めて生まれるものだと思います。身近にあるものを基準にした「ふつう」や「よい」という規範を破ってしまう、驚きの瞬間を味わってほしいのです。

残念ながら、英語圏で日本研究を行う学者と、日本におけるほとんどの日本人学者は、異なる研究方法や研究目標を持っています。私は日本語の学術研究を読むことが出来ますし、できる限り読んでいますが、ほとんどの日本人学者は私の論文を英語で読むことが出来ません。海外に拠点を置く学者は、日本語で論文を書いても海外の大学に報われませんし、仕事を続けるためには英語の一流ジャーナルや出版社で論文を出すことに集



申しなければならないので、日本語で書こうとするとキャリアを損なう可能性もあります。

私は、アメリカでは、主に白人の研究者で成り立っている学界の中でのアジア系アメリカ人であり、日本では、ほとんどが日本人の男性研究者の中での非日本人のアジア系の女性です。特に日本では、人々が一般的に想像する博士号所持者のような容姿や声を持っていません。髭やしわがたっぷりある白人男性の同僚と比べたら、同じ「外国人」でも、周りが同じように敬意を持って対応してくれないことが多くあります。私は「ハーフ」、またはエキゾチックな存在として見られ、「学生ではなく、アメリカで大学教員として働いていた、そして今では大学研究員である」という事実は、人の想像を遥かに超えてしまうようです。そのような偏見から、私の説明を一言も聞き取ってもらえないような状況は日常茶飯事です。自分がクィアと自認している話に限らず、一般的にジェンダーや人種、階級などにおける不平等や階級について、気楽に話せる場を日本の大学において見出すには努力が必要でした。

しかし、日本の学界に対するこのような私の偏った考え、時に不公平な印象を考え直させるような学者もいます。その中でも際立っている方は、少女漫画の研究者である藤本由香里先生です。ニューヨーク市で初めて会った時、彼女は何時間もかけて日本語で少女漫画の話をしてくれ、その後私がイェール大学で教えていた少女漫画の夏季授業にも遊びに来てくれました。私の問題だらけの日本語、学界の中の低い地位、ピンクに染めたモヒカン、藤本先生にとってあまり重要ではありませんでした。藤本先生は、暖かさとは信じられないほどの好奇心を持って、漫画の研究をするのに世界中を旅されていて、最も理想的で皮肉のない意味での「国際的」な存在を実現している方です。彼女と接している時に感じるのは、私をそのまま受け入れてくれる寛容さですが、私だけでなく、先生の周りの学生や他の人々も同じように感じていると確信しています。言語、学問領域、場所の間を行き来することは、周縁に追いやられて、あまり報われないように感じるかもしれませんが、それを見事にこなす方の姿を見るのは、大事な励みになります。

言語の政治性を考えると、英語能力は、日本や他の国である意味で「特権」となっています。私も様々な意味で「マイノリティ」のアイデンティティを持っているにも関わらず、英語で活躍している、アメリカのエリート教育を受けてきた人間として、大いに利益を得ているに間違いありません。英語、日本語、北京語はすべて今でも権力を振り続ける帝国主義や暴力の歴史を持っています。その上で、クィア研究者、フェミニスト研究者としての私の自己責任はどうなるのでしょうか。最近、私は言語を横断する研究だけでなく、クィアやフェミニストといったマイノリティの作品を翻訳することにも興味を持つようになりました。英語圏で研究をし続けても、これらの言語を使うことによって、言語的・文化的な境界を越えて、共感を促すような新しい連帯感を生み出すことが出来ればと思っています。

## 大学内外の良い空間を作り出すこと

今まで言及したことの大部分は、より良い空間を作るということにつながっているかもしれません。それは、マイノリティの主張が尊重され、人々が自分の世界を広げることが出来るような、想像力と連帯によって築かれる空間のことです。これらの願望は大学から押し付けられるものではなく、むしろ時には、研究に力を入れて、制度が順調に運営するように行動するという大学という組織の目標に反することもあります。しかし、今早稲田大学で公開講演を行っていることから分かるように、大学にはそれ以上の可能性があるかと強く信じてしています。問題はあつものの、大学は社会をより良くするための対話の場として大いに貢献することが出来ると確信しています。

私が想像している空間は、ある程度大学の外からインスピレーションを得ています。日本のツイッターでは、クィア、フェミニスト、反レイシズムの活動家、作家などから多くのことについて教わってきました。このような議論をツイッターではなく、別のところでも続けていきたいとよく思います。一年間ほど、大学以外で行われた様々なイベントに参加して、メモを取ることも多かったですが、一番印象に残っているのは、幾つかの異なる空間を体験して味わった感覚のようなものでした。台湾文化センターで行われた、温又柔、陳雪、松浦理英子、李琴峰という作家のイベントに参加して、日本語と中国語が飛び交っていた場面をよく覚えています。クィア雑誌『OVER』の刊行イベントでは、パネリストの方々が、日本だけでなく、アメリカや台湾など、国

境を越えてクィアの問題やフェミニズムについて語ってくれた時、本当にわくわくしました。

一番驚いたのは、韓国フェミニズムに関する幾つかの特集の刊行イベントに参加した時の気持ちです。日本人ではないアジア人女性の何人かが一緒にその場にいるだけで、周りの空気が違うと感じました。警戒心を少しだけ解くことができ、見ず知らずの人との新たな連帯感を感じとることが出来ました。本屋 B&B では、活動家の栗田隆子、そしてフェミニスト雑誌『エトセトラ』の編集者や寄稿者などの方々がパネリストになっているフェミニストのイベントに参加しました。あるイベントでは、韓国のフェミニスト小説『82 年生まれ、キム・ジョン』が話題になると、観客から大歓声が上がりました。Readin' Writin' という本屋さんでは、日本の人種差別やヘイトスピーチの問題を議論している人たちに囲まれていました。新宿二丁目にはなかなか溶け込めなくて、自分が周りの日本人にとって異質すぎると感じてしまいましたが、何人かの女性に出会って友情をゆっくり築いたおかげで、東京での生活の風景が少しずつ変わりました。

研究者として、個人として、他のマイノリティの人々が共有しているこれらのフェミニストやクィアの空間を体験することはとても貴重な経験でした。多くの状況では、これらのトピックに重なる研究興味を持つ外国人の学者として、自分が想定されていない場で声を上げて意見を言うことに躊躇しました。実際に周りにどう見られているかということは別として、余計な口を利いたり、知識をひけらかしたりするようなことをどうしても避けたいと思って、一種の自己検閲を行っていました。今は、傲慢な態度ではなくても、自分のこと、自分がやってきたフェミニストとクィアの研究を否定せずに議論に加わる方法は、絶対あるはずだったのではないかと反省し続けています。これらのイベントは、私の東京での生活に彩を与えて、大学の中で様々な対話を見つけだし続けていくやりがいにもなりました。

国や言語の狭間を生きてきた学生が多く出席する由尾瞳先生のダイバーシティのゼミでも、少し空気が違うという気がします。早稲田大学の GS センターでも、特別な雰囲気を感じられます。確かに、インターセクショナルリティに関連する分野の重要な研究がたくさん行われ、それに加えてとても充実している大学の授業もあると思います。社会改革は、研究だけでなく、学生を教えることにも潜在しています。誰もがクィアやフェミニスト研究者になる必要は全くありませんが、大学で教えられるべき欠かせない分析能力、また共感はとても重要です。しかし、学術的なものと日常生活のつながりを学生に見せたり、学者と学者でない方々との交流を促したり、アイデンティティと多様性の有意義な話からスティグマを取り除いたりすることができる空間を作るのに、まだ成長の余地があるに違いありません。マイノリティーが警戒心を解く、普段と少し違う空気を感じられるような空間を作る方法も、もっと色々あるかもしれません。

## 共感とセルフケア

私は、フェミニストとクィア・スタディーズによって、より豊かな共感 (empathy) を持つようにもなりました。結局、これらの研究分野は、このような役割を果たしていると強く信じています。簡単に言うと、フェミニストとクィア・スタディーズの構造的な差別に対する批判で分かるのは、すべてを個人のせいにして、個人に責任を負わせることで終わってしまう理解は不十分で、真の解決策に導くことが出来ないということです。特に、文系で行われてきたフェミニズム・クィア研究は、身体や感情の表現をも学問的な領域に持ち込んでくれました。

私は、女性で人種的マイノリティ、「クィア」に見える、若くみえることなど、幾つかの考えられる理由のせいで、子供扱いされたり見下されたりすることがよくあります。学問知識のおかげで苛立ちが多少おさまるとしても、毎日のように遭ってしまうマイクロアグレッションの積み重なりが消し去られるわけでもありません。しかし、性差別的、人種差別的な思い込みがすべて相手のせいであるという考え方が、根本的にずれていると理解すると、ある程度平静を保ち、共感を持って反応することができます。このような状況を教育的意義の面から捉えながら、相手に何かを教えるのに最も有用と思える反応を考えることが多いです。相手の偏見を再考させるのに、出来るかぎり効果的な言葉や行動を一生懸命考え出そうとして、学者として持つ知識のおかげで理解していることを相手にも共有できるように、自分なりに工夫することがよくあります。言うまでもなく、人が責任を取らなければならない状況もありますが、教えること、または学ぶことの両方を諦めずに挑戦

し続けることの重要性を忘れてはいけません。

フェミニスト・スタディーズとクィア・スタディーズから教わったのは、他者への共感ですが、それはまた自尊心、自分自身を大切にすることにもつながっています。その転機がいつ訪れたのか、はっきり言えませんが、クィア・フェミニストの研究を続けているうちに、もはや以前と同じように自分自身をせめたり、軽視したりすることが出来なくなりました。他者のために幸福を望んで励みながらも、自分自身を人間として扱わないで、生きる価値に生産性だけを求めることは、矛盾し過ぎました。自信がない時、または自分を他人と比較して劣等感を抱いてしまう時、このうっとうしい自分を許すこともできるようになりました。この否定的な感情は、必ずしも自分の行動、あるいは周りとの接し方を決定するとは限りません。学者は、不安に動かされて頻繁に知識を獲得しようとしながら、自分を他者と比較しがちですが、自分を人間として扱うとは、より充実した、良い人生を自分に許すということです。皆さまの前で敢えて自分の欠点について語ることで、自分への、他者への思いやりをどうやって身につけるべきかを強調する教訓のようなものになればと思っています。

私の言う「セルフケア」は、有意義な人間関係を作ることを含めますが、それと同時に、常に「完璧に」人と関係していくプレッシャーを拒否する立場も含まれています。私は、限りなく周りのあらゆる事柄や人に対して、協調的で、生産的な対応をすることが出来ません。女性や他のマイノリティの声は、怒りに溢れ過ぎていて、感情的になり過ぎていると思われて、あるいは単に「過剰」で不適切だと見なされて口止めされることがよくあります。マジョリティが不快な思いをすると、マイノリティは適切な言い方をしていないと非難されることもあります。自分の話を聞いてもらうのに努力しているマイノリティの気持ちより、いつまでもマジョリティの気持ちのほうが絶対大事なのでしょうか。そして、個人的に言うと、私は時々シェリル・サンドバーグの言う「リーン・イン」ではなく、ただ横になって休みたいと思っています。

世界的なパンデミックの中、「セルフケア」について特に考えさせられると思います。この状況の中で、自分が学界の中で生きてきたクィア・フェミニストの人生について語る意味が本当にあるのか、断言出来ないかもしれません。この45分を、むしろ世界の国々で起きている死や苦しみに言及することに使った方が意義があるかもしれません。あるいは、アメリカを始めとする諸国の大学が悲惨な状況において、多くの教員を解雇していることについて話してもいいかもしれません。これらの問題は新型コロナウイルスで始まったわけでもありませんが、今はまさにパンデミックによって急速に悪化しています。読むこと、書くこと、また大学における様々な活動によって、修復出来ないものが多すぎる時、私たちはどうすればいいのでしょうか。

私はよく、自分の世界がどれくらい小さくて狭いのかということに思いをはせます。徐々に自分の世界を広げ、目の前の日常にあるものから目を離してより先にあるものに目を配るのに、多くの方々の助けや教えが必要でした。今でも学び続けながら、焦らずに、自分のやることを小さな種を蒔くことに例えることがあります。小さな一歩を踏み出し、時折周りに助けを求めたり手を差し伸べたりして、心を開いたまま、いつか自分が役に立つように、手の届かないところにあるより大きな世界を常に意識しようとしています。

## ものを言うこと

最後に、私は「ものを言うこと」について考えることが多くあります。子供の頃は、恥ずかしさのあまり、声を出して普通に話すことさえ上手く出来ませんでした。両親はほとんど英語が出来ず、英語の単語は主に小説を読んで覚えたのですが、発音の仕方に自信が持てないこともありました。台湾に行った時に、中国語を話すのがさらに苦手だったので、親戚からは気取っているとして見られていました。日本語のほうは、正しい文法で短い論文が書けるようになるより、完全な文章を最後まで言うのに時間がかかりました。大学院の頃、または20代の大半は、当たり前のように、自分の言うことが人の注意に値するようなものではないと自己判断しました。そして、数年前に耳の手術を受けましたが、難聴の問題は完全に治したとは言えません。これは全く大きな障害とは思えませんが、非ネイティブとして人の言うことに早く反応しないと何も理解出来ないと思われるので、日本語や中国語でのやりとりをする時にさらに緊張するようになりました。

こういった要因を踏まえると、私は決して自信を持って、自分の経験や世界観などについて講演するような人とは思えません。また、異なる言語だけではなく、異なる世界の間で板挟みになってしまい、それぞれの人々



や場所に対して、時には矛盾している責任を自分に負わせてしまうこともよくあります。これからのキャリアで求められるものを現実的に考えると、韓国語は言うまでもなく、日本語と中国語においていわゆる「ネイティブレベル」の流暢さを身につける余裕はありません。自分の言葉は、これからもずっと不十分で、不完全で、むらがあると思います。または、私はこれからも一つの言語や場所で起こっていることに全ての注意を払って上手に耳を傾けることが出来ないかもしれません。したがって、どの集団に向けても、完璧に発言することなど出来ません。これからも、何か現状か背景を把握しきれていないせいで、適切なことが言えなくて申し訳なくなると思います。

しかし、自分にとってはこんなに困難なことだからこそ、ものを言ったり、お互いの言うことに耳を傾けたりする時の寛大さ、または計り知れない可能性を強く感じています。これは、読むこと、書くことによっても行われますし、もちろん直接会う時には話すこと、聞くことによって行われます。ここで強調したいのは、私たちは生身の人間として自らの経験から話して、その瞬間には他者に反応したりつながったりしようとし、結果が分からなくても勇気を出して身をさらしているということです。

私が個人的な経験や、クィア／フェミニスト研究への愛着について語ることは、インダーパルから教わったもののおかげです。声を上げる人が誰もいない時に、自分の声を恐れずに率直に話すことの重要性を教えてもらったのです。または、他の女性、クィアの人、有色人種の人々といったマイノリティのおかげで色々なことについて語るようになりました。私は常に彼女ら、彼らの共感や勇気に圧倒され、励まされるのです。この講演を準備している過程においても、私が考えたことを強く肯定して、励ましてくれる友人たちがいました。

そして、自分の「日本語での声」を見つけられたのは、ある意味でこの一年ぐらいの間に築いてきた何人かの日本人のクィアの女性との友情のおかげです。彼女らは、私の見た目や非ネイティブの日本語、あるいは博士号を気にしたりすることはありませんでした。恋愛や、クィア理論、そしてレズビアン文学について話していた時に、時間をかけて考えをまとめても、彼女らは辛抱強く待ったり、私の日本語を聞いたりしてくれて、日本社会に溶け込めない外国人の変わっているところを気に留めませんでした。面白くて、頭の回転が速い、とても思いやりのある女性たちを相手にしながら、心から大事にしていることについて日本語で会話することは、本当に楽しかったです。日本語を話し続ける動機のようなものを考えると、私は真っ先に彼女たちのこと、まだ出会ってもいないクィアの、フェミニストの女性たちのことを思い浮かべます。

この講演は、元々英語話者のオーディエンスを対象としたものでしたが、早稲田大学の公開講演において、クィアの人種的マイノリティの女性というアイデンティティに言及する際に、自分の言葉を日本語にする意義があると思いました。このようなイベントが無事に行われたのは、原稿の下訳を努めたフェミニズム研究に携わる研究者たち、女性作家の研究者兼翻訳家である由尾瞳先生、そして字幕を担当してくれた、由尾先生の素晴らしい教え子である寶藏寺伽奈さんのおかげです。自分の原稿の翻訳に取り組みながら、もう一つの「日本語での声」をも見つけました。日本で滞在した時間を締めくくるのに、このような形で講演をすることができたのは、感謝してもしきれないほど貴重なものです。

早稲田大学で受入教授になって下さった十重田裕一先生には、これからもずっと感謝します。早稲田の特別研究員になって、研究に専念しながら定職に就くことが出来ただけでなく、休息の場を与えられて、大学の中の役割と関係なくより充実した一人の人間として成長することが出来ました。早稲田への扉を開いて下さった十重田先生に加えて、由尾瞳さんは私を自分のゼミに迎え入れてくれたり、教育や文学、フェミニズムなどについてたくさん話してくれたりして、私の知っている「早稲田」という場を完全に変わってくれました。アメリカで教えてきた学生は言うまでもなく、瞳さんのゼミの学生たちは、私に言い表せないほど多くのことを教えてくれて、今日の講演にもインスピレーションを与えてくれました。そして、瞳さんの大きな存在、または揺るぎない友情によって、私は早稲田のことを心から気にかけるようになって、早稲田という空間を超える様々な意味で心を開ききっかけにもなりました。この講演を準備するにあたって、何度も自意識過剰で恥ずかしくなったり、混乱したりして、時には辛い思いもしました。しかし、瞳さんに呼ばれたら、私は喜んで何度でも早稲田に足を運びたいと思います。ものを言ったり、教えたり、他の繋がり方を模索したりするために。

今日はご清聴どうもありがとうございました。